

## 五箇村久見方言の名詞のアクセント

早田, 輝洋

<https://doi.org/10.15017/2332654>

---

出版情報 : 文學研究. 80, pp.71-83, 1983-02-25. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 五箇村久見方言の名詞のアクセント

早 田 輝 洋

1. 島根県隠岐郡五箇村久見方言のアクセントは、服部四郎氏の記述(1973:33以下)とそれを増補修正した上野善道氏の記述(1975:39以下及76)によって、3種の単語単位の声調を持つ典型的な単語声調方言(早田1977:331以下, 1978)であることが明らかになった。<sup>1)</sup> その音韻論的解釈としては、筆者も上記拙稿(1977)で試みはしたものの、原口庄輔氏のもの(1978, 1979:42以下)と服部四郎

1A (歯・絵)	エ	エガ	エデモ	エグレニ
1B (葉・柄)	エ	エガ	エデモ	エグレー
2A (雨・糸)	アメ	アメガ	アメデモ	アメグレニ
2B (山・橋)	ヤマ	ヤマガ	ヤマデモ	ヤマグレー
2C (風・口)	カゼ	ガゼガ	ガゼデモ	ガゼグレー
3A (兎・裸)	オサギ	オサギガ	オサギデモ	オサギグレニ
3B (心・涙)	ココロ	ココロガ	ココロデモ	ココログレー
3C (魚・頭)	サカナ	サカナガ	サカナデモ	サカナグレー
4A (小刀・鶏)	ニワトリ	ニワトリガ	ニワトリデモ	ニワトリグレニ
4B (九つ・朝顔)	アサガオ	アサガオガ	アサガオデモ	アサガオグレー
4C (腹締・金持)	ガネモチ	ガネモチガ	ガネモチデモ	ガネモチグレー
5A (渡し舟)	ワタシブネ	ワタシブネガ	ワタシブネデモ	ワタシブネグレニ
5B (利巧者)	リコーモノ	リコーモノガ	リコーモノデモ	リコーモノグレー
5C (稲光・宝物)	ダカラモノ	ダカラモノガ	ダカラモノデモ	ダカラモノグレー

表 1

1) 広戸惇・大原孝道(1952)により十分予測はされていた。

氏のもの(1979:79以下)がめばしい所であろう。ただ筆者としては、その基底形のたて方および基底形から音声形への導き方について、上記拙稿に対する修正も含めて、多少の意見があるので、ここに改めて取上げる次第である。

本方言アクセントのおおよその音声形を上野氏の記述(p.76)を基にして表1に示す。表中、 $\bar{O}$ は「高」、 $\bar{O}$ は「中高」、 $\hat{O}$ は「昇」、 $O$ (無印)は「低」である。表1から分るように、この方言は、1モーラ語を除けばモーラ数に(も音節数にも)関係なく3種類のアクセント型しかない3型アクセント方言である。

筆者の関心は、1)話し手の脳裡に蓄えられている各辞書項目の「基底形」と、2)音声器官を動かす指令情報である(言語学的)音声形を基底形から導く「変換規則(群)」の二つが各言語方言においてどのように仮定されるか、にある。従って、当然のことながら、表1に示されているA声調語(以下「A類語」)のよう

	単独	ガ	デモ	グレー
1A (絵)	O	OO	OOO	OOOO
1B (柄)	$\hat{O}$	$\hat{O}O$	$\hat{O}O\hat{O}$	$\hat{O}\hat{O}OO$
2A (雨)	OO	OOO	OOOO	OOOOO
2B (山)	$\hat{O}O$	$\hat{O}\hat{O}O$	$\hat{O}\hat{O}OO$	$\hat{O}\hat{O}OOO$
2C (風)	$\hat{O}\hat{O}$	$\hat{O}O\hat{O}$	$\hat{O}O\hat{O}O$	$\hat{O}O\hat{O}OO$
3A (兎)	OOO	OOOO	OOOOO	OOOOOO
3B (心)	$\hat{O}\hat{O}O$	$\hat{O}\hat{O}OO$	$\hat{O}\hat{O}OOO$	$\hat{O}\hat{O}OOOO$
3C (魚)	$\hat{O}O\hat{O}$	$\hat{O}O\hat{O}O$	$\hat{O}O\hat{O}OO$	$\hat{O}O\hat{O}OOO$
4A (鶏)	OOOO	OOOOO	OOOOOO	OOOOOOO
4B (朝顔)	$\hat{O}\hat{O}OO$	$\hat{O}\hat{O}OOO$	$\hat{O}\hat{O}OOOO$	$\hat{O}\hat{O}OOOOO$
4C (金持)	$\hat{O}O\hat{O}O$	$\hat{O}O\hat{O}OO$	$\hat{O}O\hat{O}OOO$	$\hat{O}O\hat{O}OOOO$
5A (渡し舟)	OOOOO	OOOOOO	OOOOOOO	OOOOOOOO
5B (利巧者)	$\hat{O}\hat{O}OOO$	$\hat{O}\hat{O}OOOO$	$\hat{O}\hat{O}OOOOO$	$\hat{O}\hat{O}OOOOOO$
5C (宝物)	$\hat{O}O\hat{O}OO$	$\hat{O}O\hat{O}OOO$	$\hat{O}O\hat{O}OOOO$	$\hat{O}O\hat{O}OOOOO$

表 2

に呼ぶ)で始まる音韻句(以下「A類句」のように略称する)の句頭の「高」や句末の「昇」も、またC類句の句頭の「中高」も、音声器官を動かす指令情報のうちに入るのであるが、それを基底形から導く形式化は大して面白いものと思えないので省略し、ここで考える音声形、即ち基底形を入力とする変換規則の出力形、は表2に示した上野氏の表層アクセント(素)体系(p.78)と同一のものとする。以下、Oはモーラを表す。ややぎこちない、また曖昧な、表現になるおそれもあるが、敢て弁別素性等を用いないで記述するように努めた。

表2によると、A類句は無標、B類句とC類句は句中に一つだけ「高」のモーラが有ることになる。句中のモーラ数と声調類とによって「高」の位置が一定であることが分る。この方言のアクセント型(音声形)を音韻句のモーラ数と声調類とによつて整理しなおせば、(1)のようになる。

(1)

	1	2	3	4	5	6
A.	o	oo	ooo	oooo	ooooo	oooooo
B.	ô	ôo	ôôo	ôôoo	ôôooo	ôôoooo
C.	—	oô	ooô	ooôo	ooôoo	ooôooo

「高」は、3モーラ以上のB類句では必ず第2モーラに有り、5モーラ以上のC類句では必ず第4モーラに有る。

以下、この方言アクセントの音韻論的解釈について、原口案と服部案を見、筆者の試案を提したいと思う。

## 2. 原口案

原口氏はこの方言の基底アクセント体系として(2)を仮定し、服部氏もこれを絶讃して受け容れている(1979:80)。本稿では原口氏の  $\hat{O}$  を上野、服部両氏に倣つて  $\hat{O}$  に改める。

(2) 原口氏の基底アクセント体系

A.	o	oo	ooo	oooo	ooooo	oooooo
B.	ô	ôo	ôoo	ôooo	ôoooo	ôooooo
C.	—	oô	oôo	oôoo	oôooo	oôoooo

A類句を(2)のように基底で無標と見、その音声形も(1)のように今仮に全くの無標とした以上、本稿ではA類句についてそれ以上触れる必要はないことになる。さて残りのB類句とC類句において、(2)の基底形は3モーラ以上である限り、音声形になるためには(3)のように「高」(Ô)が移動しなければならない。「高」が移動した結果の音声形を[ ]の中に入れて、基底形の下に示す。

(3)

	1	2	3	4	5	6
B.	ô	ôo	ôoo [oôo]	ôooo [oôoo]	ôoooo [oôoooo]	ôooooo [oôooooo]
C.	—	oô	oôo [ooô]	oôoo [ooôo]	oôooo [ooôoo]	oôoooo [ooôooo]

例えば、基底形/タ<sup>ハ</sup>カラモノ/〈宝物〉(5モーラC類)は音声形[タカラ<sup>ハ</sup>モノ]という形で実現しなければならない。このために原口氏は、次の規則(4)を仮定した(1979:48)。なお原口氏のVはOで表す。

(4) 原口氏の「高」移動規則

$$\hat{o}(o)_a o \rightarrow o(o)_a \hat{o} / (o)_b \text{ — } (o)_c$$

条件:(i) もしaであればbかつc。

(ii) もしaでなければbまたはc。

やや複雑な条件が付いているが、これを展開すれば(5)のようになる。

(5)

$$\hat{o}oo \rightarrow oo\hat{o} / o \text{ — } o$$

これが適用できなければ、

$\hat{o}o \rightarrow o\hat{o} / (o)_b \text{ --- } (o)$ 。

条件：b または c。

これを散文で述べれば、「前に1モーラ有る「高」は、後に少なくとも3モーラ有れば、2モーラだけ後に移動する。前に1モーラ有る「高」でも、後に2モーラか1モーラしか無ければ、後に1モーラだけ移動する。前に1モーラも無い「高」は後に少なくとも2モーラ有れば後に1モーラだけ移動する」となろう。例えば、基底形／ $\hat{r}i$  コーモノ／〈利巧者〉は「 $\hat{r}i$ 」の前に1モーラも無いが、後に「コー」と2モーラは有るから、「高」は後に1モーラ移動して音声形[ $r\hat{i}$  コーモノ]となる。また基底形／ $\hat{t}a$  カラモノ／〈宝物〉は「 $\hat{t}a$ 」の前に「タ」という1モーラが有り、後に「ラモノ」という3モーラが有る故、「高」は2モーラ後に移動して音声形[ $t\hat{a}$  カラモノ]となる。

### 3. 服部案

服部氏は、基底形(氏の基底アクセント素体系)としては原口氏の(2)を全面的に受け容れているが、音声形(氏の表層アクセント素体系)を導く規則としては、次のような一組の順序づけられた規則を提示している(1979:80以下)。

#### (6) 服部氏の「高」移動規則

- (i) 「3モーラ以上のもののアクセント核を1モーラずつ後へ移動させる」
- (ii) 「5モーラ以上のものの第3モーラの核を第4モーラへ移動させる」

これを普通の表現形式で表せば次のようになるろう。

#### (7)

- (i)  $\hat{o}o \rightarrow o\hat{o} / \left\{ \begin{array}{l} (o)_a \text{ --- } (o)_b \\ oo \text{ --- } o \end{array} \right\}$
- (ii)

条件：a か b か 少なくとも一つは必要。

例をあげれば次のようになる。

(8)

／ $\hat{y}$  マ ガ／  $\xrightarrow{(i)}$  ヤ  $\hat{m}$  ガ  
／カ  $\hat{z}$  ガ／  $\xrightarrow{(i)}$  カ ゼ  $\hat{g}$   
／ $\hat{r}$  コーモノ／  $\xrightarrow{(i)}$  リ  $\hat{c}$ ーモノ  
／タ $\hat{c}$ ラモノ／  $\xrightarrow{(i)}$  タカ $\hat{r}$ モノ  $\xrightarrow{(ii)}$  タカラ $\hat{m}$ ノ

原口氏の「高」移動規則(4)と服部氏の「高」移動規則(6)(=(7))を比べると、散文で見る限り文句無く服部氏の規則の方がすっきりしている。また、式で表した形でも(4)より(7)の方が分りやすい。(4)の規則の条件は、人間の脳裡に蓄えられている規則の一部としては不自然ではなからうか。二つの規則を一つに纏めるのにやや無理が感じられる。

#### 4. 筆者の試案

筆者としては、服部氏の受け容れた原口案(2)のような、音声形とずれの大きい基底形は受け容れ難い。話し手の脳裡に／ $\hat{y}$ マ／の形で蓄えられている形が、単独では[ $\hat{y}$ マ]と実現し、助詞が付けば「高」移動規則で[ヤ $\hat{m}$ ガ]などに実現するのはよいのであるが、[リ $\hat{c}$ ーモノ][リ $\hat{c}$ ーモノガ][リ $\hat{c}$ ーモノデモ]等々と実現して決して[\* $\hat{r}$ ーモノ……]とは実現しないものの基底形を／ $\hat{r}$ ーモノ／としたり、[タカラ $\hat{m}$ ノ][タカラ $\hat{m}$ ノガ][タカラ $\hat{m}$ ノデモ]等々と実現して決して[\*タカラ $\hat{m}$ ノ……]とは実現しないものの基底形を／タカラ $\hat{m}$ ノ／としたりすること——／ $\hat{r}$ ーモノ／、／タカラ $\hat{m}$ ノ／という形で話し手の脳裡に蓄えられている、とすること——は考え難いことに思われる。この方言では各自立語がA、B、Cのどの類に属しているかさえ分っていれば、その自立語で始まる音韻句の長さ(この場合モーラ数)から完全に音声形が予測できる。従って、最も抽象的な基底形をたてるならば、分節音の他には、AかBか

Cかという単語単位の類別符が指定されているだけで十分なのである。

それでは、例えば「利巧者」「宝物」の基底形はそれぞれ／リコーモノ／／タカラモノ／<sub>C</sub>でよいのであろうか。筆者はかつてそのように記述したことがある（1977：333以下）。しかし、助詞が付いても付かなくても常に[リ<sup>ハ</sup>コーモノ…][タカラモノ……]で現れるアクセント形が、単に類別符だけで話し手の脳裡に蓄えられている、というのも現実的と思えない。話し手の辞書の中には、[リ<sup>ハ</sup>コーモノ]は／リ<sup>ハ</sup>コーモノ／として入っており、[タカラモノ]は／タカラモノ／として入っていると考えるのが自然である。[<sup>ハ</sup>ヤマ～ヤ<sup>ハ</sup>マガ]など「高」が移動する自立語も／<sup>ハ</sup>ヤマ／の形で辞書中に蓄えられている、として不都合はない。話し手には、その辞書項目のモーラ数と「高」の位置から、その属する類がA、B、C三つのうちのどれであるか分るのである。A、B、Cのどの類にも属しえない形は、この方言としては不適格な形 ill-formed とされる。即ち、この方言の話し手の辞書の中には各自立語がその単独での実現形と同じ形（(1)、むしろ表2の「単独」の形）で蓄えられており、規則によって辞書項目の形からその属するA、B、Cの類も分り、音韻句中のモーラ数の変化による実現形の変化も指定しうる、と考えるのである。規則は各辞書項目には適格条件 well-formedness condition として働き、助詞等が付いて音韻句中のモーラ数が変わるときに音韻規則として作用することになる。そこで、A、B、C3類と音韻句中のモーラ数から音声形(1)を生成 generate する（produce ではない）規則が必要になる。本稿ではA類に何も指定しないので、残余のB、Cの類に「高」を指定する規則さえ考察すればよい。

辞書項目単位でなく音韻句単位の音声形としての(1)を生成する規則の為に、服部案のように考えるにしても、その基底形(2)のうちのC類句についてその第2モーラを「高」とするよりも、できるだけ第3モーラを「高」にする方が「高」移動規則が簡単になる。ここで「できるだけ」と述べたのは、第3モーラの無いC類句——2モーラ句——では第2モーラを「高」にする、ということである。即ち、原口氏の(2)を多少変えた(9)のような形をまず出し、次に(10)の



「高」移動規則を適用して音声形(1)を得るのである。

(9)

A.	o	oo	ooo	oooo	ooooo	oooooo
B.	ô	ôo	ôoo	ôooo	ôoooo	ôooooo
C.	—	oô	ooô	ooôo	ooôoo	ooôooo

(10) 筆者の「高」移動規則

$\hat{o}o \rightarrow o\hat{o} / \text{---} o$

この「高」移動規則を散文で述べれば、「後に2モーラ有る「高」は後に1モーラ移動する」となる。(9)に(10)を適用した若干の例をあげる。

(11)

B 山	ヤマ	→ (ヤマ)
	ヤマガ	→ ヤマガ
	ヤマデモ	→ ヤマデモ
C 風	カゼ	→ (カゼ)
	カゼガ	→ (カゼガ)
	カゼグレー	→ カゼグレー
C 魚	サカナ	→ (サカナ)
	サカナガ	→ (サカナガ)
C 金持	カネモチ	→ (カネモチ)
C 宝物	タカラモノ	→ タカラモノ
B 利巧者	リコーモノ	→ リコーモノ

上の矢印の左辺(9)に当る形は基底形でないことに注意せよ。そこで、(9)を得る規則を考えるのであるが、さきにも述べたように、(9)においてはB類句は第1モーラを「高」にし、C類句はできるだけ第3モーラを「高」にするのであ

るから、まず「できるだけ」を無視すれば(12)のような規則が考えられる。

(12)

B, C類句について

$$o \rightarrow \hat{o} / \#\#\langle \underset{c}{oo} \rangle \text{ ---}$$

この規則は次のような二つの規則に展開される。

(13)

(i) C類句について

$$o \rightarrow \hat{o} / \#\#\text{oo} \text{ ---}$$

(ii) B類句について

$$o \rightarrow \hat{o} / \#\# \text{ ---}$$

即ち、(13)の(i)はC類句の第3モーラを「高」にし、(13)の(ii)はB類句の第1モーラを「高」にする。そこで、さきの「できるだけ」を考慮に入れれば、(9)から明らかなように、C類句に2モーラしか無いときには、第3モーラでなく第2モーラを「高」にしなければならない。従って(13)の(i)は(14)のように改める。

(14)

C類句について

$$o \rightarrow \hat{o} / \#\#(o)o \text{ ---}$$

そこで(14)と(13)の(ii)を纏めて(15)を得る。

(15) 「高」指定規則

有標(B, C類)句について

$$o \rightarrow \hat{o} / \#\#\langle \underset{c}{(o)o} \rangle \text{ ---}$$

この(15)の規則を見ると、C類名詞については2モーラ以上でないと適用でき

ない。従って、1モーラC類という名詞が仮に有るとしたら、「高」は指定されずA類と同じ形になる筈である<sup>2)</sup>。「柄」は[ $\hat{\text{e}}$ ]であるが、「絵」の方は[エ]であるから/エ/という辞書項目で辞書中に蓄えられているわけであるが、これは/ $\underset{\text{A}}{\text{e}}$ /と仮定しても/ $\underset{\text{C}}{\text{e}}$ /と仮定しても[エ]に実現する筈であり、ともに辞書項目の形と一致する。ただ、無標のA類とも有標のC類とも、どちらにもとれる時には無標(A類)とされるのであろう。それ故、1モーラ名詞にはC類が無い、ということになり、多モーラ句になって「絵が」[エガ]、「絵でも」[エデモ]のようにA類の形で実現するものと考えられる。

さて、単独の場合の音声形と同形の辞書項目の基底形に、「高」指定規則(15)と「高」移動規則(10)を適格条件として当てはめてみることによって、A、B、C 3類への所属も分り、即ちこの方言の形として適格であることも分り、あるいは適格でないことも分る。A、B、C 3類への所属の分った辞書項目で始る基底音韻句に「高」指定規則(15)を適用すれば(9)が得られ、それに「高」移動規則(10)を適用すれば音声形(1)が得られる。<sup>3)</sup> 規則適用の若干の例をあげよう。この例において(15)と(10)が適格条件として適用されて出た形が、(話し手の脳裡に蓄えられている)辞書項目の形と一致する場合には○印を付し、一致しない場合には×印を付しておく。

2) このことから1モーラ名詞に関して、A類を“かつての”C類と合流したものと速断することは不可である。少くとも金田一氏の類別との対応はそうっていない。B類の方こそ、下に見るように、金田一氏の二つの類が“合流”したものである。(資料は広戸・大原 p.159による)

金田一氏の類別		五箇村方言の類別
1類	柄, 子, 帆	} B類
2類	名, 葉, 日	
3類	絵, 木, 粉, 菜, 火, 穂	A類

3) 「高」指定規則(15)はより厳密には、「同一音韻句中に「高」が指定されれば、その音韻句中の他の「高」は弱化(消失)する」という約束のもとに、次のような表現でなければならない。

有標句について

$M \rightarrow [H] / \#\# \langle (M)M \rangle \_$

ただし、Mは(ôでもoでもよい)モーラ、[H]はô。

(16)

／／の中 適格条件  
辞書項目 (15) (10)

音韻規則  
(15) (10)

／ $\hat{\text{エ}}$ ／〈柄〉

$\text{エ}_A \rightarrow (\text{エ}_A) \rightarrow (\text{エ}_A) \times$

$\text{エ}_B \rightarrow \hat{\text{エ}}_B \rightarrow (\hat{\text{エ}}_B) \circ$

$\text{エ}_C \rightarrow (\text{エ}_C) \rightarrow (\text{エ}_C) \times$

／ $\hat{\text{エ}}_B \# \text{デモ}$ ／ $\rightarrow (\hat{\text{エ}} \text{デモ}) \rightarrow \text{エ} \hat{\text{デ}} \text{モ}$

／ $\hat{\text{ヤマ}}$ ／〈山〉

$\text{ヤマ}_A \rightarrow (\text{ヤマ}_A) \rightarrow (\text{ヤマ}_A) \times$

$\text{ヤマ}_B \rightarrow \hat{\text{ヤマ}}_B \rightarrow (\hat{\text{ヤマ}}_B) \circ$

$\text{ヤマ}_C \rightarrow \text{ヤマ}_C \rightarrow (\text{ヤマ}_C) \times$

／ $\hat{\text{ヤマ}}_B \# \text{ガ}$ ／ $\rightarrow (\hat{\text{ヤマ}} \text{ガ}) \rightarrow \text{ヤマ} \hat{\text{ガ}}$

／ $\hat{\text{カゼ}}$ ／〈風〉

$\text{カゼ}_A \rightarrow (\text{カゼ}_A) \rightarrow (\text{カゼ}_A) \times$

$\text{カゼ}_B \rightarrow \hat{\text{カゼ}}_B \rightarrow (\hat{\text{カゼ}}_B) \times$

$\text{カゼ}_C \rightarrow \text{カゼ}_C \rightarrow (\text{カゼ}_C) \circ$

／ $\hat{\text{カゼ}}_C \# \text{ガ}$ ／ $\rightarrow \text{カゼ} \hat{\text{ガ}} \rightarrow (\text{カゼ} \hat{\text{ガ}})$

／ $\hat{\text{カネモチ}}$ ／〈金持〉

$\text{カネモチ}_A \rightarrow (\text{カネモチ}_A) \rightarrow (\text{カネモチ}_A) \times$

$\text{カネモチ}_B \rightarrow \hat{\text{カネモチ}}_B \rightarrow \text{カネモチ}_B \times$

$\text{カネモチ}_C \rightarrow \text{カネモチ}_C \rightarrow (\text{カネモチ}_C) \circ$

／ $\hat{\text{カネモチ}}_C \# \text{ガ}$ ／

$\rightarrow (\text{カネモチ} \hat{\text{ガ}}) \rightarrow \text{カネモチ} \hat{\text{ガ}}$

／ $\hat{\text{リコーモノ}}$ ／〈利巧者〉

$\text{リコーモノ}_A \rightarrow (\text{リコーモノ}_A) \rightarrow (\text{リコーモノ}_A) \times$

$\text{リコーモノ}_B \rightarrow \hat{\text{リコーモノ}}_B \rightarrow \text{リコーモノ}_B \circ$

$\text{リコーモノ}_C \rightarrow \text{リコーモノ}_C \rightarrow (\text{リコーモノ}_C) \times$

／ $\hat{\text{リコーモノ}}_B \# \text{デモ}$ ／

$\rightarrow \hat{\text{リ}} \text{コーモノ} \text{デモ}$

$\rightarrow \text{リ} \hat{\text{コーモノ}} \text{デモ}$

／タカラモノ／〈宝物〉

タカラ <sub>A</sub> モノ → (タカラ <sub>A</sub> モノ) → (タカラ <sub>A</sub> モノ) ×		／タカラ <sub>C</sub> モノ #グレー／
タカラ <sub>B</sub> モノ → タカラ <sub>B</sub> モノ → タカラ <sub>B</sub> モノ ×		→ タカラ <sub>B</sub> モノ グレー
タカラ <sub>C</sub> モノ → タカラ <sub>C</sub> モノ → タカラ <sub>C</sub> モノ ○		→ タカラ <sub>C</sub> モノ グレー

## 5. 結 論

筆者の考えでは、この方言の名詞の辞書項目の基底形は、その単独での実現形(音声形=表2の「単独」の形)と同じ形である。名詞の辞書項目(自立語)に対する適格条件として、「高」指定規則(15)と「高」移動規則(10)が仮定される。(15)と(10)はこの順序で適用され、各辞書項目がA, B, Cどの類に属するか、或いはそのどれにも属しないか、を見て、その適格性を明らかにする。この(15)と(10)は、辞書中に蓄えられていない形の音韻句の時——辞書項目に助詞が後続する時など——でも、その句のアクセント形の適格性を保障すべく、音韻規則として適用される。

仮に、この方言の名詞の辞書項目の基底形を実現形と同じでなく、かつての拙稿(1977: 333以下)の如くアクセントに関してはA, B, C3類の類別符だけを持っているとしたら、音韻規則は同じく(15)と(10)だけでよく、同じ音声形が出るが、A, B, Cいずれかの類別符が付いている名詞の辞書項目は、類別符が付いているというだけでこの方言の適格形ということになる。何故、或る単語には類別符が付くのであろうか。A, B, Cいずれの類別符も付いていない不適格形の単語——外来語なり他方言からの新しい単語なり——というのは、どうして類別符が付かないのか。(15)(10)を適用する際に、A, B, Cいずれの類と仮定して適用してもそのアクセント形が出て来ないから類別符が付かないのだ、とするしかないであろう。しかし、(15)(10)の出力形とそれとの一致不一致を見られるのは、その実現形を知っているからこそなのである。少なくともこの方言の名詞の辞書項目は、適格形不適格形を問わず、実現形(音声形)で

脳裡に蓄えられている、と考えるのが一番理解しやすい。(2)のように決して実現しないアクセント形で話し手の脳中の辞書に蓄えられている、ということは、A, B, Cの類別符だけが蓄えられているという以上に理解し難いのである。服部氏(1979:87)は、「“正しい”表層構造さえ生成されればどんな手続きを取ってもよい、とする生成音韻論においてしばしば見られるやり方」には「賛成できない」とされている。筆者としてはさらに、正しい音声形さえ“生成”できればどんな基底形を仮定してもよい、とするやり方には賛成できない、と付け加えたい。音韻形(基底形)から音声形を導く手続き(規則)よりも、音韻形そのものの方がはるかに重要だ、と筆者は考えている。

引 用 文 献

- Haraguchi, Shosuke 1978 "The Tone System [of the Kumi Dialect: An Autosegmental Analysis," *Descriptive and Applied Linguistics*, 11. 65-85.
- 原口 庄輔 1979 「日本語音調の諸相」『言語の科学』7号 21-69.
- 服部 四郎 1973 「アクセント素とは何か? そしてその弁別的特徴とは?」『言語の科学』4号 1-61.
- 1979 「表層アクセント素と基底アクセント素とアクセント音調型」『言語の科学』7号 71-96.
- 早田 輝洋 1977 「生成アクセント論」『岩波講座 日本語5-音韻』323-360.
- 1978 「語声調方言」『九州大学文学部 文学研究』75輯 29-38.
- 広戸惇・大原孝道 1952 『山陰地方のアクセント』報光社
- 上野 善道 1975 「アクセント素の弁別的特徴」『言語の科学』6号 23-84.